

# 特別対談

## スマートウェルネスシティの実現に向けた健幸まちづくり



八幡市では、兼ねてからそこに住むと健幸になれるまち「スマートウェルネスシティ」(以下、SWC)の実現に向けた健幸まちづくりを施策の柱の一つに掲げ、取り組みを進めています。

そこで、SWCの考えを提唱された筑波大学大学院人間総合科学研究科教授の久野譜也先生をお招きし、堀口市長との対談を実施し、人生100年時代を幸せに生き抜くポイント、少子高齢化社会で必要な取り組みや、八幡市の健幸まちづくりの成果と課題等について伺いました。



平成4年筑波大学大学院博士課程医学研究科修了。博士(医学)。東京大学大学院助手などを経て、平成23年より現職。

堀口 文昭

八幡市長

久野 譜也さん

筑波大学  
人間総合科学学術院教授

### 「知る」「行動に移す」「続ける」が大切 社会との関わりを持ち続けよう

人生100年時代を幸せに生き抜くためには

——人生100年時代を市民の皆さんが幸せに生き抜くための思いや取り組みについて市長の考えは

市長 現時点において、平均すると80年以上生きる時代になっています。さらに100歳までとなると「食」「運動」、そして負担のない「緊張感」が重要で

「緊張感」は社会とのつながりを持つということに近いと思います。

人生100年時代に向けて、市の施策を通じて、市民の皆さんには、ヘルスリテラシー(健康や医療に関する正しい情報を探して、理解して活用する能力)を高めていただき、歩くことや運動に関心を持ち、最初の一歩を踏み出してもらいたいという思いがあります。

——久野教授からも人生100年時代に向けての考えを

教授 我々が取り組んでいるSWCに、今118の全国の自治体に入ってもらっています。そのなかでも八幡市の取り組みは、健幸ポイントプロジェクトの医

療費や介護給付費の抑制をはじめ、狙っている効果も出てきていて、事業を上手く展開されていると思っています。

——国でもコミュニティの重要性や社会的包摂といったことが重要視され始めているが、思うことは

教授 社会的包摂は、人と人が助け合って誰も取り残されず、誰もが社会参加する機会を持つことを意味します。この社会的包摂の反対語は社会的孤立です。

——高齡化社会の一方で、人口減というキーワードもあり。日本の人口も2100年には5千万人くらいに減るといふ推計もある。少子化問題もある中で、八幡市での取り組みは

市長 八幡市では、保育所の待機児童ゼロを維持している状況で、子育てをしやすい環境をつくつてい

ま、新しいコロナウイルス感染症によつて、顕在化した問題点もあります。「自分を守る、自分の家族を守りたい」ということで、他

にも社会的孤立の一例です。また、

「知る」「行動に移す」「続ける」が大切

### 社会参加の場を創出

### 市民の「健幸」が市の「健幸」につながる

もう一つは、先ほど市長のお話のとおり、緊張感を持つということ、社会との関わりを持つてほしいという事です。仕事という社会参加が終わった後で、どのように社会と関わって

少子高齢化・人口減少社会の中で自治体が目指すべき「まち」の姿や必要な取り組み

人に排他的になつてしまつたところがあり、社会としての寛容性を高めていく必要があると思います。

市長 これまで歩くことを促す「やわた未来いきいき健幸プロジェクト」や、健幸情報伝達の仕組みとして「健幸アンバサダー事業」に取り組んできましたが、これらを通じていきたいと考えています。

教授 順調にSWCの理念を具体化していただけたと思つており、これからも継続していきたいとお言葉もいただき、我々としても嬉しい気持ちです。

八幡市の先見性の中で、データもうまく活用しながら今の生活をより良くするという観点と、これから産まれてくる子どもたちを含めて20年、30年後の未来を見据えて、よりよい「まち」になつていくための取り組みや、まちづくりを進めていただければと思つていま

す。施設という視点では、子ども・子育て支援センター「すくすくの杜」という施設を平成27年度にオープンし、子どもたちが自由に遊べるだけでなく、子育てをする保護者が情報交換や気軽に子育ての悩みを相談できるように運営しています。

また、SWC首長研究会でご紹介いただいた文字の書いていない絵本を使った「子はたからプロジェクト」などの取り組みも進めているところでは、国民全体の意識を変えていくという視点も必要になつてくると思

います。

このことは、経済的にも計り知れない影響があることですが、少子化対策になかなか取り組めていない現状があると思います。

このような課題の解決に向けては、

司会に塚尾晶子さん(右)を迎え、対談する久野教授(中央)と堀口市長(左)

